

Title	平井新 社会思想史研究
Sub Title	
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.4 (1960. 4) ,p.414(108)- 415(109)
JaLC DOI	10.14991/001.19600401-0100
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600401-0100">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600401-0100</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

的發展をとげたか、その社会経済的条件、各地の生産・流通構造の性格とその変遷、近代化への展望を明らかにすることに主眼がつかれ、その内容は、関東地方経済圏の形成の出发点となった近世江戸の経済を中心として、その大規模な封建的消費経済を漸次満して行くようになる地廻り商品の生産と流通の発展という形で、江戸周辺の農林水産加工品、鉱産物、北関東の織物、その他各種特産物の実態が広範囲にわたって叙述され、民間の農村工業とともに藩の特権的保護産業、さらには明治初期の官営工場による移植近代工業をも含み、これら全体を通じての近代産業への転換とその展望が、結論的に要約されている。

以上を通じての全体としての特徴は、織物等の代表的産業を除いては、その多くが近代化産業資本形成のための条件を生み出し得ず、衰退して行く過程が克明に分析されている点にあり、従来の幕末維新期の経済段階論における一義的な断定、単純化に対する反省と再検討を要請し、かつ段階論の一面性を再考せしめる上で極めて重要な資料を提供したものとといえる。しかし、同時に、考察の仕方

が地方的・個別産業的観点に重点をおき、対象とする時期も主として明治初期までに限定しているため、これら郷土産業の多くが、衰退しつつもなおかつ変質しながら明治以降の日本資本主義の産業構造のなかに再編成され、やがては中小・零細工業の一環として存続・再生産させられて行くことの意味、日本資本主義のなかでのかかる郷土産業の構造的な位置づけ等の問題(冒頭における第二の問題)への手懸りは、本書からは十分に求められない憾みがある。もっとも、この問題は、「産業史の過去と現在をつなぐカナメ」(「大系」編集だより一九六〇年一月)として、本研究の今後に残された大きな課題であろうが、さし当っては続刊のうちの総論篇がこれをどのように扱うかが期待される(東大出版会・A5・五六〇円)。

尾城太郎九一

平井新著

『社会思想史研究』

社会思想という学問は、経済思想のみならず

政治、法律、哲学、宗教、芸術、科学などあらゆる分野の思想を対象としなければならないので、そこに思想史を学ぶ者のなみなならぬ労苦と、また誇りとが秘められている。平井教授の新著は、一貫した通史ではないけれども、古代ギリシャの社会思想(ホメロス、ヘシオドス、アリストパネス、プラトン、アリストテレス、ストア)、ヘブライズムの社会思想(旧約聖書の社会思想、メシア思想の起源と進展、イエスの社会思想、原始キリスト教と初代の教父達)、聖トーマスの財産論について、近代フランスの社会思想(啓蒙期の社会主義と道徳哲学―特にモレリイとマブリーを中心として)、ジャン・メリエとその「遺書」、バブーフの共産主義理論、プランキの階級闘争説とプロレタリア独裁説、ルイ・ブランと「労働の組織」、国際労働者協会(第一インターナショナル)の起源について、「社会主義」「社会主義者」という用語の起源、の諸章に、さらにコンンデランの「社会主義原理―十九世紀民主主義宣言」の翻訳を加えて、特殊研究のまことに広汎な集成である。古代、中世の思想はこれまでとなく文学史や宗教史の視角が中心であった

し、フランス近代思想の研究は日本では特に手うすなので、類書の少ないこの書のユニークな意義は、経済学史におけるE・セリグマンの *On Some Neglected British Economists* にもたとえられよう。

コンンデランの「宣言」は、「共産党宣言」の種本と騒がれたこともある重要な文書で、教授の手によって昭和三年に三田学会雑誌に訳出されたことがある。これとマルクスとの関係については「共産党宣言剽窃問題」(同誌一九卷六号)にすでにくわしい。この書と「近代フランス社会主義の潮流」などを併読することによって、近年ようやく盛んとなりつつあるフランス社会思想史の研究に対する教授の先駆的な業績の一端をうかがい知ることができる。(鳩書房・A5・四七二頁・七八〇円) 白井 厚

高村象平著 『ドイツ・ハンザの研究』

事実をして語らしめ、決して飛躍しないということは、歴史研究で求められる基本的な

態度である。今日この基本に徹する研究の乏しいなかであって、高村教授の新刊は注目されていい。ぜひ一読をすすむたい。そして歴史家として発言するため著者が示したなみなみならぬ努力を学んでほしいものである。本書は、これと前後して一条書店から刊行された『ドイツ中世都市』と共に、教授の学位論文を構成する。序にあるように、著者は、廿五年間にわたり、その完成のため没頭した。本書は、昭和八年以来引続く研究の成果である。一口に廿五年といっても、その間には戦争という大きな事件が介在し、多忙な時期であったことを思えば、終始一つ問題と取組み、地道に研究を続けるのは、そう容易なことではなかった。その意味で、教授の態度は称賛されなければならない。事実を語ろうと思えば、史料に深く沈潜することが肝要である。歴史家にそれができるのは、事実の探究に際しつねに謙虚な態度をうしなわれない限りであった。歴史する心とは何か。読者は本書によってその本質にふれることができるに違いない。史料に向い謙虚に問いかける場合にのみ真実が得られると思うべきである。ところで事実の背後に著者が理解しようとする

したのは何か。序によれば、それは、近世から中世にかけてのヨーロッパで、ハンザの栄光をになった名もない商人たちが、資本主義の発展にどれほど寄与したかを示すにあった。歴史は人によってつくられるといわれる。しかしその人とは、終始かけの存在ではあるが、歴史を動かす実際の力もなった人々のことであった。著者のかかげる究極の目標はささやかなものではあるが、実は歴史家すべてが共通に持つべき性格のものであった。もともとそのことの解明のためはじめられた経済史であり、経済史の方法が今日わが国でそのまま歴史研究の全体に及ぼうとしているが、著者をはじめ、諸先学の啓蒙によるものであった。

著者はハンザ研究を通じて一つの人間像を描こうとした。しかしいまだ不備だらけであると告白しておられる。ロシア語の素養を欠くというだけの理由で、ノイヴゴロト商館にふれようとされないが、残念至極である。研究の地域もあわせて拡大することによって、前進していただきたいと思うのは、筆者のみではあるまい。(日本評論新社・A5・二三八頁・四七〇円) 一渡邊國廣